

INSIDE

Bosnia and Herzegovina

Philippines

Uganda

Bolivia

New York

国内活動



BUNKYO VOLUNTEERS 2007

出発



支援者の皆さんから届いた物資と募金を携えてボスニアへ出発。

Sarajevo (サラエボ)



サラエボのムスリム人集団墓地 至るところに紛争中に亡くなった方々の広大な墓地を見る。7千人以上の市民が銃撃や砲弾で死亡した。



民族融和のためのコミュニティガーデン

米独の民間資金の支援で2000年に始まった異なる民族共同の農園。自給用の野菜を共同作業で作る。民族融和の貴重な実験だ。写真はボスニアの形をしている花壇。植えられている花は主要都市の位置を表す。



地雷探知犬訓練センター

産まれてまもないベルギーシェパードの子犬たち。生後まもなくからラジオで音楽などを聞かせ、成長後は騒音を含むあらゆる環境に対応できるように訓練。



地雷探知犬訓練センター 実践的な探知訓練が毎日続く。センターの地雷探知犬による除去活動で被害に遭った人や犬は今まで皆無だという。

Prijedor (プリエドール)

ハンバリネのユースセンター

剣玉・紙風船・わなげ・だるま落として遊ぶボスニアの子供たち。



ルビアのユースセンター

子どもたちに書道を指導。みんなとても興味津々。



ルビアのユースセンター

代表のサネラ(左から2番目)や子どもたちといっしょに。キルトやサッカーボール、文具や募金を寄贈した。

ハンバリネのユースセンター

代表のアズラに学内外で2カ月間かけて集めた支援金の一部を渡した。



ハンバリネのユースセンター

昨年鶴嶺高校から寄贈された手作りキルトは、今も美しく大好評。

ハンバリネのユースセンター

2006年の文教ボランティアズの募金で整備された2階。窓枠とガラスが取り付けられ、天井もむき出しのコンクリートが覆われた。子供たちは真冬でも集まることできる。





ルビアの破壊された市民ホール

紛争で破壊されたまま残されている。ここで殺された人が着ていたと思われる服と靴も残されている。



紛争で破壊された民家

車の中から見た破壊された家。窓やドアがなく、屋根も落ちてしまっている。



ロマの居住区で(プリエドール)

私たちがホームステイした家のすぐ近くに暮らしていたロマと呼ばれる少数民族の人たち。貧しい暮らしぶりを遮断するかのよう、狭い居住区の入り口には鉄の扉があった。



地雷の警告サイン

山や森の入り口に掲げられた「地雷地域」を示すサイン。多いところでは5メートルに1つの間隔で警告している。



ハンバリネの帰還難民の子供たち

みんな明るい笑顔で迎えてくれた。

Sanskimost (サンスキーモスト)



サンスキーモストの遺体確認所

埋められていた服などの遺品とともに遺体が並ぶ。これらの遺品を手がかりに遺族の方々が確認しに来る。



サンスキーモストの遺体確認所

この遺体はほとんどがムスリム人で、現在3500体の遺体の身元が確認されている。



サンスキーモストの遺体確認所

銃で撃ち抜かれ3方にひびが入った子供の頭蓋骨。



サンスキーモストの遺体確認所

遺体からとられた髪の毛。リボンがついていることから女性のものであることが確認できる。



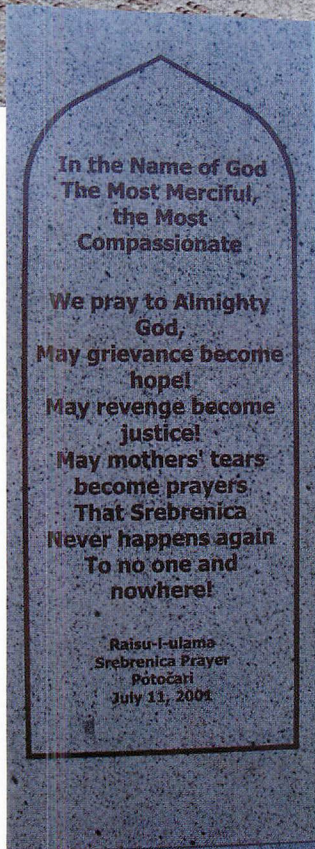
サンスキーモストの遺体確認所

バラバラになった遺体を元の体形に復元する。

Srebrenica (スレブレニツァ)



スレブレニツァのメモリアルパークの石碑 虐殺されたとみられる人の名前がすべて刻まれている。



スレブレニツァのメモリアルパーク (ムスリム集団墓地)

ボスニア語、アラビア語、英語で書かれた祈りの碑。「全能の神に祈る。悲しみは希望に、憎しみは正義を望む心に、母の涙は祈りに変わることを。スレブレニツァの地獄は世界のどこにもだれにも繰り返されてはならない」(生田祐子 訳)



スレブレニツァのバッテリー工場跡

スレブレニツァは国連平和維持軍のオランダ軍が守っていたが、同軍はセルビア人勢力の総攻撃を逃れて工場に避難してきたムスリム人をセルビア人側に引き渡した。戦後ヨーロッパ最大の人道的悲劇である大虐殺の始まりだった。



スレブレニツァのメモリアルパークの石碑

『8372』は今までに確認された虐殺された人の数。しかし未発見であったり、身元確認ができない遺体は多い。『…』はこれから数が増えるということを示している。



スレブレニツァのメモリアルパーク

身元確認を終えて家族に返された遺体が埋葬されている。毎年数百体の身元が確認され、その数だけ墓碑が増える。

Mostar・Sarajevo (モスタル・サラエボ)



世界遺産のモスタルの橋 ムスリム人とクロアチア人のコミュニティは川を境界に分けられていた。



サラエボ空港地下のトンネル

紛争中、安全地帯であるサラエボの南の郊外へセルビア軍に見つからずに出られるように、空港滑走路の真下にトンネルが掘られた。



トンネルの中

トンネル内には、トロッコのレールが敷かれて、生活物資や武器の輸送に大きな役割を果たした。中は非常に狭く、高さは1.6mほど。雨が降るとひざまで水浸しになった。



サラエボ大学

アズラ・ハジアフメトビッチ博士(サラエボ大学経済学部教授、欧州議会ボスニア・ヘルツェゴビナ(BH)代表)からボスニアの現状のプリフィングを受け、学内を視察。



サラエボの日本大使館

最終日ボスニア活動の報告のため訪問。疊(もたい) 臨時代理大使から温かいねぎらいの言葉をいただいた。

壁の向こう側に住む人々



貧富を分ける壁

こちらはスラム街。壁の向こう側には裕福な人たちが暮らしている。



子供健康フェスティバル

虫歯で上の歯が全てない男の子に歯磨きの方法を指導。



「カエルの合唱」輪唱

日本から持っていったリコーダー39本とピアノ7台を寄付。コミュニティでの最終日のFarewell Partyで現地の子供たちが習ったばかりのリコーダーで演奏。私たちの帰国後も練習を続けているそうだ。



讚美歌とダンス

フィリピンは音楽が盛んな国。音楽とダンスで私たちを迎えてくれた。日本に帰ってきてからもつい口ずさんでしまう。



セメント作り

家の土台作り。手作業でセメントをこねた。



ハラーナ

男の子から女の子に愛を告白するとき、ギターでラブソングの弾き語りをする(ハラーナ)。私たちにも心を込めたハラーナでお別れの挨拶。



スラム街を流れる川

さっきまでピンクだったのに…。近くの染色工場からの廃水が七色に川を染める。また、「ゴミどこに捨てればいいの?」という質問に、現地の人は「川に捨てればいいんじゃない?」



折り紙教室

みんなでパッチンカメラを作った。では「ハイ、チーズ!」



リコーダー教室

毎日開いたリコーダー教室。初めて吹くリコーダーを真剣に練習する子供たち。



工作ワーク

折り紙で1人一つずつ花を折って、みんなで木に花を咲かせた。



バスケットコート完成

コートの建設は滞在中の重要活動の一つ。ネットにつけられていた鍵をはずして、みんなでシュートを打って完成祝い。



びしょびしょ

台風接近の中、現地の人たちと一緒にカッパを着て作業。カッパが意味をなさなくらいの豪雨だった。



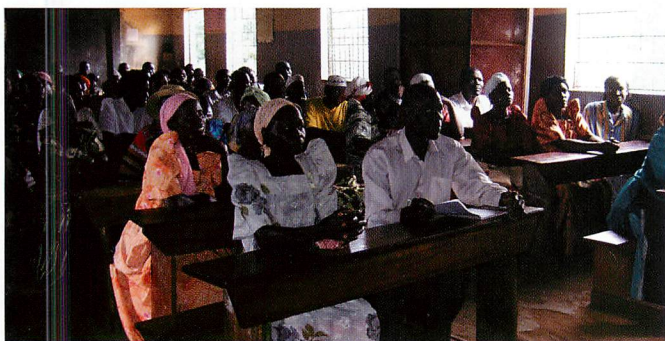
日本から持っていったリコーダーで合奏

現地の人たちのためにカントリーロードを3重奏で合奏。本番はアンコールが起こるくらい喜んでもらえた。



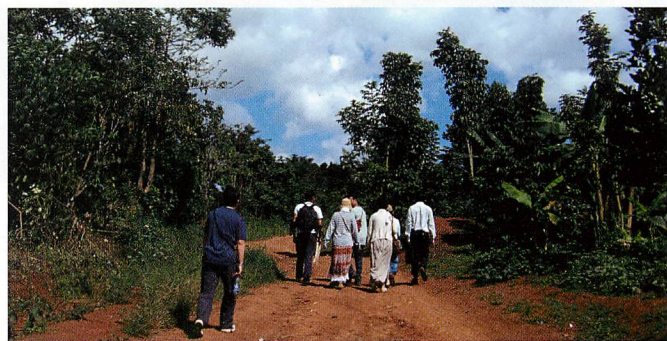
里子訪問中に会った子供たち

里子の家庭訪問中に車を珍しがり寄ってきた子供たち。ウガンダの子供たちはみんなこのような服装で素足。私たち日本人を珍しそうに見つめている。



ウガンダ式PTA会

コミュニティー訪問で近くの小学校に行った。その日はちょうどPTA会の日で、保護者が教室にいた。みんな温かく歓迎してくれた。



里子訪問中

道が凸凹過ぎて車で進めないため、歩いて移動。ウガンダの空はとても広い。



ワーク中

レンガを運び終わり、土台作りのために穴を掘っているところ。土が固い、アリ塚がある、木の根っこがある等々で作業が大変だった。



レンガのバケツリレー

列になり、横の人にレンガをバケツリレーのように回した。ウガンダの現地人はレンガを投げて回していた。



家の裏にある台所

ウガンダでは通常外に台所、トイレ、風呂場がある。台所では石炭で料理する。私たちは毎日炭火焼き料理を食べていた。ママたちが夕食の準備をしている。



里子の家にいた近所の子供

私が出会った子供で唯一笑わなかった子供。肌の色が違う人種を見るのは初めてらしくとてもおびえた様子だった。



日曜学校の様子

日曜日は「日曜学校」という教会の学校で歌を歌ったりお祈りをしたりする。この日はみんなおしゃれをして、特別な洋服を着ていた。私たちのために歌をうたってくれた。



職業訓練学校の土台用に一日かけて掘った穴

ウガンダの土は粘土質でとても固いうえに、日本のようにショベルカーやクレーンがないため、くわとスコップで汗だくになりながら掘った。私たちボランティアはみんな手に豆が出来て大変だった。



チョーガの日曜市場

電気製品も少しあるが、ほとんどが服の店。



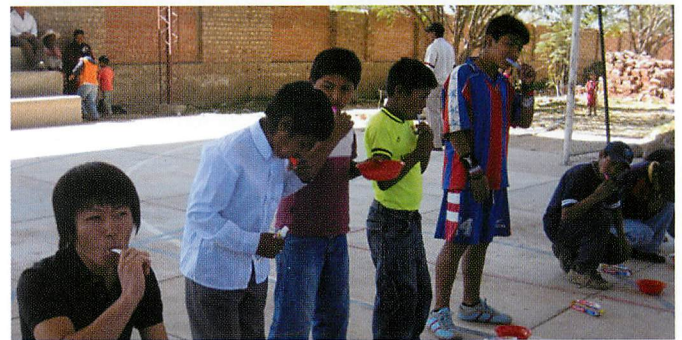
ウンベルト君とお父さん

日本人が支援している里子。彼をはじめ、里子の未来を共に築いていくのが里親だ。



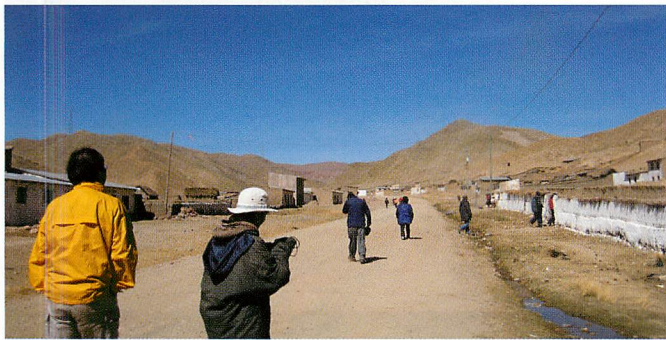
家畜と民族衣装の女性

羊やヤギが道を横断。日本にはない光景が広がる。



子供達のための衛生キャンペーン

この地域では食事の前に手を洗ったり、歯を磨くといった教育が行われていない。



チャヤ

学校ができたことによって、このコミュニティに引っ越してくる人々が多い。学校は彼らにとって重要なものなのだ。



学校の授業訪問

多くの質問が飛び交った。特に生徒は日本の学生の生活スタイルに興味を抱いているようだった。



世界最高の料金所(チャヤ)

標高4295m。富士山よりも高い場所ですべての人々が生活している。



ボリビアの景色

ボリビアの空はどこまでも青い。美しい山々がそびえる。



チャヤの子供達

みんなカラフルな民族衣装に身をまとっている。ここには、今なお伝統が息づいている。



トイレ&シャワールーム

レンガを積み上げて綺麗な個室のトイレを作る。ゼロから始めた作業も、現地の人たちと協力することによって、だんだん形になってきた。



建設前の学校のトイレ

野外に設置された簡易トイレ。衛生面に問題があり、子供達には清潔なトイレが必要だ。



学校のトイレ建設

トイレから出る汚水を溜め、浄化し、それを再利用する施設を作るための穴を掘る。地道で体力を使う作業。



学校のトイレ建設

深くなるとバケツリレーに変更。この穴が、綺麗な新しい水洗トイレの基盤となる。



9.11テロ現場の「グラウンド・ゼロ」

同時多発テロで破壊された世界貿易センターがあった場所。メモリアルタワーの建設が始まっている。



グラウンド・ゼロに展示されている事件直後の記録写真

現場の悲惨さ、残酷さ、そして消防隊員の絶望感のすべてを語る。



コロンビア大学の学生とのディスカッション

コロンビア大学日本語学科3年生と「日本の習慣と宗教」というテーマでディスカッション。彼らの質問（例えば、角隠しはどんな意味があるのか）は鋭く、日本文化の説明に大汗をかいた。



文教大学生から贈られた千羽鶴（聖パウロ・チャーチ）

グラウンド・ゼロの前にあるこの教会には、日本からの千羽鶴を飾る場所が設けられている。



総会議場

後列左から2番目が今回の国連研修でお世話になった渡部真由美氏(国連人道問題調整部・人間の安全保障ユニット)。世界を舞台に働く渡部氏は凛々しく、輝いていた。



安全保障理事会会議場

紛争が起きると、世界の平和と安全の維持の責任を持つ安保理が世界の注目を浴びる。



The Association to Benefit Children(ABC)

ハンディを持っている子供たちへの支援施設でボランティアを体験。ここで私達は手作りの紙芝居を彼らに読んだり、浴衣の着付けをしたり、彼らの名前を習字で書いたりした。励ますつもりだったが、彼らの屈託のない笑顔に、逆に元気をもらった。



国連本部見学

日系アメリカ人ガイドの案内。国連の歴史、悲惨な戦争や貧困の現状に国連がどう関与しているかなどの説明を受けた。国連ガイドは全員3カ国語以上を話す。



国際連合本部

国連職員によるブリーフィング、会議の傍聴、外交団が集う食堂での昼食会も経験。



Bowery Missionでのスープキッチン・ボランティア

Bowery Missionは1897年から、男性ホームレスを対象に、食事・衣服などの提供や社会復帰の支援を行っている。“Serve like serving a king.”という姿勢が大事だと教えられた。



Bowery Missionで合唱

Bowery Missionに併設する教会で歌(Hail Holy Queen・千の風になって)を披露。食事を一緒にとったホームレスの人達が聞いて、大きな拍手をくれた。

国内活動



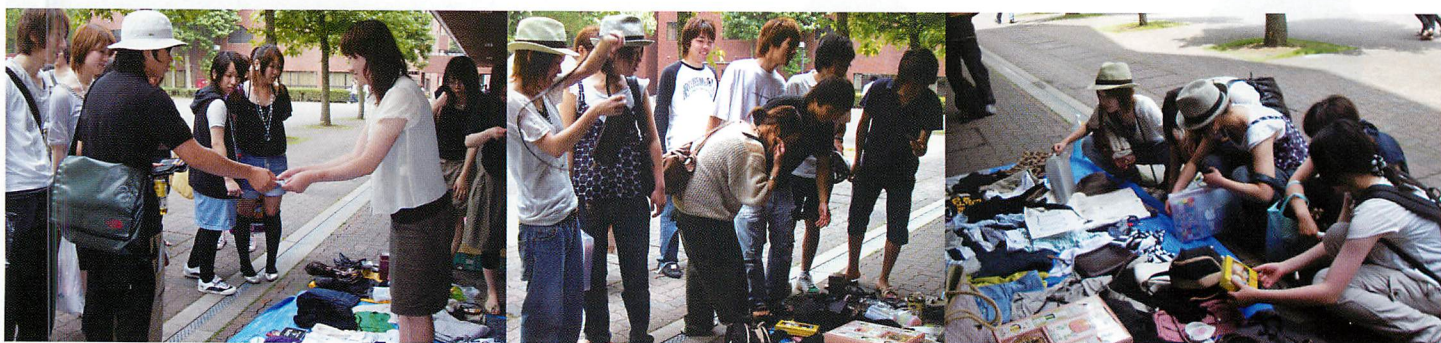
学内募金

昼休みに学内の内庭に立ち、募金を呼びかけた。学内の多くの人々が募金に協力してくれた。



茅ヶ崎駅前の募金活動

土日に市民の方々に募金を呼びかけた。市民の方々からの応援が大きな励みになった。



学内フリーマーケット

教職員や学生に家で使わないもの（食器、文房具、衣服など）を持ち寄ってもらい、学内でフリーマーケットを行った。売り上げ全額をボスニア・ヘルツェゴビナに届けた。

国内活動



湘南台でのフリーマーケット

湘南台で行われたフリーマーケットに参加し、学内や地域から集めた衣類や生活雑貨などを売った。売り上げ全額をボスニア・ヘルツェゴビナに届けた。

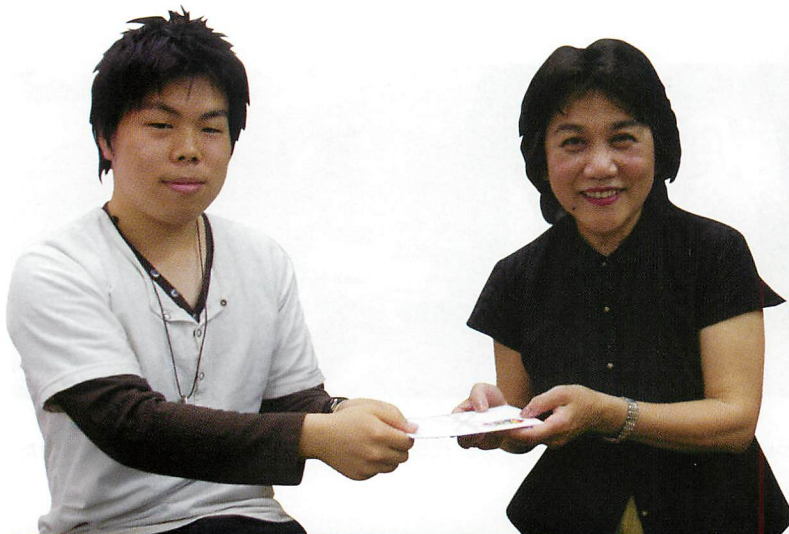


大学祭である「聳塔祭」での写真展示

2007年10月26日(金)～28日(日)の三日間で行われた聳塔祭で、活動の様子を記録した写真展を行った。多くの学生、市民の方々が見に来てくれ、熱心に話を聞いていた。

国際ソロプチミスト茅ヶ崎支部から 支援金をいただいた。

(写真右:清水瑠美子氏)



ボスニア・ヘルツェゴビナ

「支援物資」
を集めています。

活動場所:
ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争被災地

募っている支援物資:
生活具: 鉛筆、色鉛筆、消しゴム、鉛筆削り、クレヨン、定規など
+ 文房具に異議は現地の子供達に新しいものを提供してもらいたいので、できる限り新しいものをお願いします。
楽器: リコーダー、ピアノ、カスタネットなど
道具: ボール (サッカー、バレー、バスケットなど)、縄跳びなど
連絡先: 文教大学 文教ボランティアズ 代表者 岡本 大夢 (Hiromi Okamoto)
e-mail a5w31034@shonan.bunkyo.ac.jp

支援物資の収集を呼びかけるためのポスター
学内や市内の学校、母校などに貼ってもらった。

目次

1.	「文教ボランティアズ」の実践 － 7年間の活動の軌跡	1
	国際ボランティア委員会委員長・国際学部教授 生田祐子	
2.	ボランティア活動と学生生活	3
	国際学部 国際関係学科 3年 岡本大夢	
3.	07年度活動報告 「活動を終えて」 座談会	8
	07年度活動参加者	
	司会：国際ボランティア委員会委員・国際学部教授 中村恭一	
4.	ボスニア・ヘルツェゴビナ活動	23
5.	フィリピン活動	30
6.	ウガンダ活動	32
7.	ボリビア活動	34
8.	ニューヨーク活動	36
9.	後方支援活動	39

文教大学国際学部

「文教ボランティアズ」の実践 — 7年間の軌跡

国際ボランティア委員会
委員長 生田 祐子
(国際学部教授)

文教大学湘南キャンパスには、「文教ボランティアズ」と呼ばれる学生たちがいます。自発的に海外へ出かけ、ボランティア活動を行うグループです。世界の紛争地の復興現場に立って、国際社会の平和構築活動を直接見聞すると共に、孤児や帰還難民の子どもたちに文房具などの物資支援や精神的サポートを行ったり、住民たちの生活再建支援などを行ってきました。2006年度からは、国際NGOの一つである国際飢餓対策機構の協力を得て、同機構主催のワークキャンプと称するボランティア活動への参加も始め、アフリカ、アジア、南アメリカの貧困地域の開発支援にも携わっています。

海外での活動が主となることから、国際学部教員がアドバイザーとしてより持続的、効果的に指導できるように、同学部内に教員組織である国際ボランティア委員会を設け、国際機関や現地関係者、NGOとの活動調整や現地大使館への協力要請を含む全面的な支援活動支援を行っています。これまで7年間という相当期間の活動の結果、文教大学として現地の関係者とも持続的な関係が生まれ、国際協力活動の一端を担う大学として、内外からの支持を得てきました。

ボランティア活動の基本的精神を実践するためにも、渡航費などの個人関係経費は全額参加者の個人負担です。このため学生たちは、アルバイトをはじめとする様々な困難もまさにボランティア精神を体現するために頑張ってきました。ボランティアという名前や活動に興味があっても、海外でのボランティア活動に参加したり、その後も国際協力に取り組むことができる学生は、決して多くはありません。それでも7年間の持続的活動により、ボランティアズとして海外へ出ていった国際学部学生は、延べ150人近く、国内での活動のみに関わる後方支援学生も加えると、200人近い学生が、文教ボランティアズならではの貴重な国際協力活動を学生時代に体験しています。

この活動は、ニューヨーク国連本部を退職して2001年度から文教大学に赴任した中村恭一先生の指導のもと、紛争直後のコソボ行きから始まりました。文教ボランティアズがこれまでに出かけた地域は、コソボ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、東ティモール、ウズ

ベキスタン、ネパール、ルワンダ、クロアチア、フィリピン、ウガンダ、ボリビアに及びます。いずれも民族和解、難民帰還、学校再建、孤児救援など紛争後の復興や開発に向けて奮闘している地域です。

学生たちは、学内外で集めた文房具や楽器、スポーツ用具、衣料品を困窮状態にある子供や村人たちに届けたり、孤児院で孤児たちと生活を共にしながら衛生・環境教育をしたり、NGOのマンダラ植樹活動などに参加したりしてきました。また紛争被害児童（コンボの少女ベシアナちゃん）の日本での治療支援や新潟中越地震の被災者支援のための募金活動、あるいは実際に救援ボランティアとして現地被災地に出かけるなどの活動も行ってきました。

海外活動に参加した学生は、帰国後、一様に学生生活を送る意識が変わり、将来本格的な国際協力活動を進路にしようと決意する学生が現れるのも大きな特徴です。現に卒業後NGOや青年海外協力隊に参加して、海外での協力活動を実践する卒業生はその数を増やしています。最近の例でいえば、外務省国際協力局で実践的修業を始めた卒業生もいます。現役学生、卒業生を問わず、やがては国際協力を自分の使命として取り組みたいという思いを心の中に温めている人は少なくありません。

文教大学国際学部は、2008年度から、これまでの国際関係学科と国際コミュニケーション学科の2学科が再編されて、国際理解学科と国際観光学科の新体制に変わります。これを機にこれまでの国際ボランティア活動とこのボランティア活動報告も今回で一度終止符を打ち、全面的に見直す運びです。しかしそれなりの実績を築いてきた海外での協力体験活動は、これまでも中心となってきたゼミを核として継続させていきたいと考えております。

文教大学内外の多くの関係者に対して、これまでのご協力に厚くお礼を申し上げます。また将来展開される新たな形式の国際協力活動に対しても、強力なご支援を切にお願い申し上げます。

ボランティア活動と学生生活

文教ボランティアズ代表
岡 本 大 夢
(国際関係学科 3年)

1. ボランティア活動を始めたきっかけ

私は広島出身で、被爆地広島でのさまざまな経験が今につながっています。

小中学校ではJRC（Junior Red Cross：青少年赤十字）の活動に関わり、小学校、中学校、高校では平和教育を受け、「国際平和を実現するためにはどうすればいいのか」という問いを常に考える環境にありました。中学2年生のときには母に連れて行ってもらった青年海外協力隊の報告会で開発途上国の現状、そして日本の青年が世界各地で困っている人のためにさまざまな活動をしていることを知りました。

その中で、「ヒロシマの経験したこと、広島が廃墟から立ち上がったという事実を世界に発信し、平和の大切さをアピールしたい」「国際平和のために何か役に立ちたい」という漠然とした考えを持ち始めました。大学受験を控えた時期に、国際社会の働き、国連の活動などに興味を持ちました。近くの図書館に行き、国連の活動についての本を探しているときに一冊の本に出会いました。それが私のゼミナールの担当教授であり、ボランティア活動の指導をして下さっている中村恭一教授が翻訳・解説されたブライアン・アークハートの『炎と砂の中で－PKO（国連平和維持活動）に生きたわが人生』（毎日新聞社刊）という本でした。この本を読んで国連の働き、PKOの働きにいつそう興味を持ち、中村教授のいる文教大学国際学部への進学を決めました。

大学に入り、「国際学入門」などの授業で世界をさまざまな角度から見ていく中で、大学生として世界の役に立てることをしたいと考えました。そして、出会ったのが今活動している「文教ボランティアズ」です。

2. 文教ボランティアズ

文教ボランティアズは2001年に発足し、今年度で7年目になります。国際学部の学生が、主に世界各地の紛争地での戦後復興の支援や日本のNGOや現地のNGOが現地で行っている復興プロジェクトへの参加、孤児院などの恵まれない子供たちの支援活動、難民支援などの活動をしてきました。直接現地へ行き、あまり支援の行き届いていない場所で

「学生だからできること、自分たちにできること」を行うことを活動目標としています。これまでにコソボや東ティモール、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナなどで活動してきました。

ボランティア活動といっても現地での活動だけではありません。現地の NGO などに寄付する募金やユースセンター（帰還難民の子供たちのための施設）に届ける文房具などの支援物資の協力を大学所在地である茅ヶ崎市の市民や活動メンバーの母校に呼びかけるなどの事前準備がとても大切です。募金活動は土日を使って行い、炎天下の茅ヶ崎駅前で、通行人に協力をお願いしました。学内においても昼休みに募金協力を呼びかけました。

また、現地での活動の前に活動地の内政や経済状況などをしっかりと理解していく必要があります。そのために集まって勉強会も行いました。

こうした地道な努力が現地での活動に活かされています。

3. 活動に参加する意義 — 教科書だけではわからない現状

2007年、私たちが活動したボスニア・ヘルツェゴビナは紛争が終結してから12年が経ちました。紛争については、本を読んだり、ビデオなどの映像を見たりすることによって理解することができます。大学の授業でも紛争のことやその後のことについては勉強できます。しかし、その紛争を身近に感じることができるかといわれると難しいです。

現地の活動に参加することによって、私たちはボスニアの人々の「過去の戦争を悲観するだけでなく、民族和解に向けての前向きな姿勢」を感じ取ることができました。また、砲弾の痕が残ったままの建物の壁や破壊された建物のあとなど生々しい紛争の傷あとを見ると、同じ地球のなかで最近起きた紛争なんだということを実感しました。それはとても衝撃的でした。紛争を現実のものとして受けとめ、さまざまな国際問題を身近に考えられるようになりました。

4. 国際機関にはできない国際協力

私たち学生のボランティア活動によって現地の人々の役に本当に立てるのか。このような疑問は活動に参加したみんなが持っています。

ある日、あるメンバーからこんな相談を受けました。「渡航費などの活動費を全部募金に回したほうが現地の人々に役に立ちませんか」。これはボランティア活動をしている多くの人が感じる疑問だと思います。しかし、私たちが現地へ行って活動することこそが大切だと思います。紛争から12年が経ち、現地の人々は自分たちの悲劇を忘れられているのではないかと、紛争は遠い世界のことで、もはや他の地域の人には関係ないと思われているの

ではないかという不安と寂しさを感じるのが普通です。そのような折に、遠い日本の学生が訪れること自体を現地の人々はとてもうれしく思ってくれます。募金活動や文房具などのわずかの支援物資であっても、それは国際機関などとは違う人と人の心を直接結ぶ手作りの国際協力となっています。

5. ボランティア活動を通して

(1) さまざまな人々との出会いと協力

私たちのボランティア活動は多くの方々に支えられて成り立っています。募金活動などキャンパス外での活動を通じてさまざまな方々と出会い、そして支援してもらっています。

なかでも茅ヶ崎市内の学校、市民活動サポートセンターを通じて多くの市民の方々が毎年支援をしてくれています。中学生や高校生は学内で募金や文房具の収集を呼びかけてくれました。その中学校や高校の卒業生が、募金活動中に通りがかって声をかけてくれることもありました。市民の方々からの応援が私たちにとっての大きな励みです。「頑張ってるね」の一言をかけていただける度に暑い中の募金にいつそう気合いが入りました。

(2) 葛藤、とまどい

ボランティア活動は楽しいことばかりではありません。メンバーのほとんどが自分たちの活動に疑問を感じることもありました。

「自分たちの活動は支援の行き届いていない場所で学生だからできることを行うということだけど、募金活動をしていて、ホームレスの方が周りにもかかわらず、その人たちの支援をしていない。日本からずっと離れたボスニアの支援をしている」。こんな思いで悩み、葛藤しました。しかし、活動が積み重なるにつれて、自分たちが決めたボスニア支援に自信を持ってやっ払いこうと考えるようになりました。そのような思いの背後にはボランティアズの先輩方が活動してきた7年間の実績と市民の方々の理解があります。

また、周りの友達に「ボランティアなんてやって意味あるの？大変だね」と言われることが多くありました。しかし、自分が今やっていることが誰かの役に立つということがうれしいし、ボランティアは意味がないとか大変だとか考えていてはできないと信じられるようになりました。ボスニアで現地の人々の笑顔を見たとき、やってきてよかった、次もがんばろうという気持ちになりました。

(3) 苦労

金銭面ではとても苦労しました。ボランティア活動という自分のやりたいことをしてい

るのだから親には迷惑をかけられないという気持ちで、誰もが渡航・滞在費用などの経費のためにアルバイトをしてお金をためました。

また、親の理解という点で参加するかどうか悩んだメンバーもいました。紛争地に行くので、いくら今は安全だといっても親としては不安なところはどうしてもあります。しかし、みんなそれぞれに親を説得し、理解してもらいました。先生から直接親に手紙や電話で説明をしていただいたケースもあります。ボランティア活動では、たとえ学生の活動であれ、基本的には個人の自己責任で参加するというのが大原則です。他人の責任にすぎるようでは紛争地の人々の苦しみを本当に理解し、少しでも役立つことができればという国際協力精神は生まれません。それこそが先輩たちが身をもって示してきてくれたことです。

6. 将来へのつながり

文教ボランティアズの活動に参加して一番大きかったことは、私個人に関して言えば、将来の目標を明確化できたことです。漠然と「国際平和のために何か役に立ちたい」と思っていたのですが、「国連職員になって世界の平和構築の一助となる」という将来のビジョンを描くことができています。

春のニューヨーク研修では国連本部を見学し、国連職員の方々から直接国連の活動についてブリーフィングを受けることができました。そればかりか多くの国連職員の方々と親密にお話をする機会があり、彼らが国連で働こうと思ったきっかけや国連で働くまでの道のり、国連内部の生の声も聞くことができました。国連が今行っている平和構築、貧困削減などへの地道な努力の話聞く中で、絶対に国連で働きたいという確信を持つことができました。このとき知り合うことができた国連職員の方々とは研修の後もメールで将来についての相談にのっていただいたり、国連についての質問をしたりしています。

また、ボスニア研修では紛争の悲惨さを目の当たりにして、このような非人道的なことは再び起こしてはならないと強く感じました。広島出身の私にとって「ノーモア・ヒロシマ」とボスニアのスレブレニツァ平和公園で見た碑文の“The Srebrenica never happens again To no one and nowhere!”（「スレブレニツァの悲劇は世界の誰にも、どこでも繰り返されてはならない。」）は全く同じ願いです。

7. 最後に

ボランティア活動は自分たちだけでは決して行うことはできません。多くの方々の支え、協力があってこそ成り立ちます。市民の方々の協力は私たちにとって欠かせません。文教ボランティアズの活動がこれほど大きいものになったのも一般市民の方々や市民活動サポ

ートセンター、国際ソロプチミスト茅ヶ崎支部の皆様のご支援があったからだと思います。

生田祐子教授、中村恭一教授には私たちのために多くの時間を割いていただき、現地との連絡を始めさまざまな形でご尽力いただきました。またニューヨークでも、ボスニアでも、現地に同行していただいた先生方から、国際社会や民族紛争、国際協力についてそれぞれの現場で具体的に解説していただけたことは、教室の授業では絶対に得られない貴重な実践的教育の機会だと思いました。

最後に、私たちにとって不可欠だったのは親をはじめとする家族の理解と協力です。家族がボランティア活動への参加を理解してくれて初めて、私たちは現地へ出かけることができました。

私たちの活動に賛同し、協力して下さったすべての方々に心よりお礼を申し上げます。
本当にありがとうございました。

07年度活動報告

活動を終えて — 座談会

座談会参加者

国際ボランティア委員会 委員長・生田祐子教授、委員・中村恭一教授

ボスニア・ヘルツェゴビナ

岡本大夢（国際関係学科3年）、山崎裕惟（国際コミュニケーション学科3年）、
今井久美子（国際関係学科2年）、横澤麻友（同2年）

フィリピン

安西由記（国際関係学科2年）、戸谷帆奈未（国際コミュニケーション学科2年）、
目黒拓也（国際関係学科1年）

ウガンダ

熊手智恵（国際関係学科2年）、二ノ宮裕史（同2年）

ボリビア

木下大樹（国際関係学科2年）

ニューヨーク

小山浩太郎（国際コミュニケーション学科3年）、布施沙希恵（同3年）、
岡本大夢（上述）、菅原実香（国際関係学科3年）

後方支援

菅原実香（上述）、山井めぐみ（国際関係学科2年）、大川友理恵（同2年）、加藤
智望（同2年）

司会（中村恭一教授）

皆さん、ボランティア活動ごくろうさまでした。ゴールデンウィーク明けから本格的な準備が始まり、毎週水曜日の集会はもちろん、炎天下での募金活動やフリーマーケット、海外活動参加のためのアルバイトなど、本当に頑張ったと思います。学園祭でも立派な展示をして多くの人に見てもらうことができました。



そこで今日は、2007年の活動を総括する意味で、皆さんから率直な感想を述べていただいて、協力してくださった学内の友人や教職員、また茅ヶ崎市民活動サポートセンターや国際ソロブチミスト茅ヶ崎支部の皆さん、物資、募金で協力してくださった多くの方々

へのお礼を込めた報告を座談会形式で行いたいと思います。

感動したこと

司会

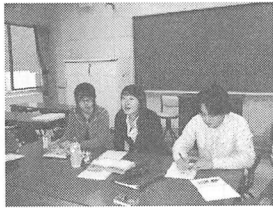
まず皆さんから、活動中に体験した「感動したこと」を話していただきたいと思います。

岡本大夢（ボスニア・ヘルツェゴビナ）

何と言っても、募金活動をしていたときの市民の方の応援です。夏の暑い中、毎週土日に茅ヶ崎駅前に立ってやったんですが、その暑さが吹っ飛ばすくらい市民の皆さんの「がんばって！」という言葉は嬉しかったです。

文教ボランティアズがこれまで7年間活動してきたということがあるからこそ、応援してもらえるんだなと感じて、それが自信にもなりました。

安西由記（フィリピン）



私は現地の人たちの温かさに感動しました。いつも私たちを温かく迎えてくれました。特に感動したのは、ハラーナです。フィリピンでは男の子から女の子に告白するとき、彼女の家でギターを使ってラブソングを弾き語りして告白します。これをハラーナというそうですが、現地の人たちは、私たちを歓迎する意味でこのハラーナをやってくれました。そして、一人に1輪ずつ白いバラをくれました。とても感動した夜でした。

熊手智恵（ウガンダ）

私が感動したことは村に着いた時の村の方々の出迎えです。私たちが村に着いた時にはもう日も落ち、普段ならみんな寝てしまっている時間でした。しかし、約30人のおじさんやおばさん、子供たちが歌やダンス、楽器などを演奏して賑やかに私たちを迎え入れてくれました。私たちもさっそく一緒に歌い踊りました。約24時間かけて、くたくたになりながら現地に着いた私たちでしたが、その歓迎で元気になりました。村の人たちの温かさに触れてよかったです。



木下大樹（ボリビア）

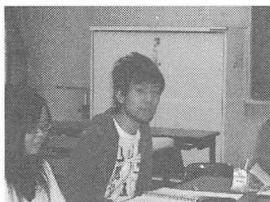
僕は景色に感動しました。どこまでも青い空、近い太陽、連なる山々…。ボランティア

ズに入ってなかったら、南米に行く機会だってなかったかもしれない。こんな経験が出来るのも、国際ボランティアズならではのようです。

菅原実香（後方支援）

私は後方支援として募金やフリマとか国内での活動しか参加できなかったけど、その時に募金してくれる人の心の温かさとか、小さい子供同士でお金を入れに来てくれたりしたことに感動しました。少しでも、私たちの活動に興味を持ってくれて、理解してくれる人たちがいることを知れただけでも嬉しかったです。そして、その人たちがかけてくれた「頑張る」などの言葉の一つ一つに力をもらいました。

小山浩太郎（ニューヨーク）



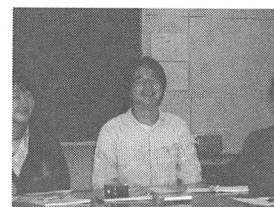
まずニューヨークの NPO 団体 ABC(Association to Benefit Children)でのボランティア活動です。この団体は、病気や貧困、家族などの理由で十分な教育が受けられない子供達が学ぶところです。私達はここで、紙芝居・歌・日本の遊びや文化（着付け、紙飛行機、書道）を彼らに紹介しました。私が今までに行ったボランティアは、川縁や団地での清掃活動でした。それは、達成感を感じられるのですが、レスポンスがありません。今回のボランティアは人間・子供たちが対象だったので、自分が行ったことに対してレスポンスがすぐに返ってくるのです。それは、笑顔だったり、質問だったり、または退屈そうな表情を浮かべたりなどです。このようなボランティアは初めてだったのでとても感動的でした。次にグラウンド・ゼロの訪問です。世界貿易センタービルは存在しなかったけれど、そこにはなぜか十分な存在感があり、独特の空気が感じられました。犠牲者を悼むと同時に、感動をおぼえました。

横澤麻友（ボスニア・ヘルツェゴビナ）

私たちが行ったプリエドールにある2つ目のユースセンターにイタリアのトレント市の学生が来ていて、彼ら主催のコンサートに参加させてもらう機会がありました。このコンサートは紛争で破壊されたのち放置されたコンサートホールのような場所で電気もない真っ暗な中で行われたのですが、ローソクの火の明かりの中、舞台上で「千の風になって」を歌い、ボスニアやイタリアの人たちから拍手をもらいました。自分たちの来た意味を実感できて感動しました。

目黒拓也（フィリピン）

今回、フィリピンのワークキャンプに参加させていただいたのですが、メンバー15人のうち14人が女性、男性が僕だけということで、初めはなかなか馴染めませんでした。ほとんどの作業がペアであり、女性のメンバーはやはり女性だけで組んだので、僕は一人になるところだったのですが、現地のある協会の青年会のみんながいつも僕についていてくれたので、寂しい思いをしなくて過ごすことができました。このとき、彼らの人を思いやる気持ち、優しさに触れて感動しました。



山崎裕惟（ボスニア・ヘルツェゴビナ）



コーディネーター兼通訳をしてくれた、イゴレ（Igor）という青年がいて、彼は本当に親切で気の利く人でした。私たちはボスニアの言葉も話せないし、聞いて理解できないので、現地の人々のお話はすべてイゴレに英語にしてもらい理解することができました。また、わがままを言ったりもしていたと思うけれど、おいしいレストランに連れて行ってくれたり、美しい滝があるマーティンブロードというところを案内してくれたりしました。彼のそんな優しさに感動しました。

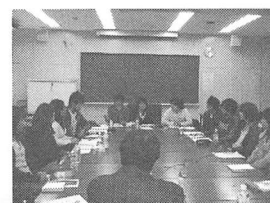
戸谷帆奈未（フィリピン）

私も安西さんと同じで人の温かさを感じました。日本の文化にはない、ハグの習慣がとても素敵でした。たくさんの子供たちにハグをされて、とてもうれしかったです。また、子供たちのやさしさにも感動しました。ワークの途中で雨が降ってきたのですが、子供たちは一生懸命になって傘を私たちに差してくれました。

印象に残ったこと

司会

常にだれもが経験することですが、皆さんも現地の人々と活動や交流を通して触れ合う数日間で多くの感動を得たことがよく分かりました。特に子供たちから得た感動はいつまでも忘れられないと思うし、この子供たちが親と同じような苦しみを味わうことがないような世界になってほしいと強く思ったことと思います。国際協力は理屈や理論よりも、まずは感動すること、直接体験することだということを実感してもらえて非常に良かった



と思います。では次に、これらの活動中に印象に残っていることを話してもらいたいと思います。これは、いいことも悪いことも、さまざまなケースがあると思います。

岡本大夢



一つは、マイノリティ民族のロマの人々の生活の現状です。僕たちがロマの人々が暮らしているところに着くと、ロマの人々が押し寄せるように近寄ってきて、ある種の恐怖のようなものを感じました。ロマの人々が住んでいるところは一般の人々が住んでいる街の中にあるんですが、入口は鉄の扉になっていて、周りとは隔離したような状況でした。鉄の扉の中にある建物は掘立小屋のような粗末なもので6畳くらいの狭い部屋の中に10人くらいが住んでいるような状態でした。また、トイレと台所が隣同士にあるような衛生的によくないところでした。僕たちがホームステイをしていた家とその近くに二つあって、夜、女子の宿舎の家に送りに行った帰りに一人でロマの住居の前を通った時は街灯がないこともあり、半開きになった鉄の扉の向こうに少し恐怖を感じました。

二つ目は、地雷の恐怖です。町の郊外に車を走らせるとすぐに地雷があることを示すドクロ・マークが道の両側に見られました。ドクロ・マークはだいたい5メートルおきにあって、現地の人々が毎日地雷を意識して生活していると思うと、背筋が凍る思いでした。

熊手智恵

私の一番印象に残っていることはウガンダの道です。都心部周辺はしっかりと舗装されているのですが、私たちが滞在していたムコノ地区と呼ばれる地域一帯は舗装されていませんでした。ウガンダの土地は粘土質で、雨が降ると溶けて柔らかくなります。そこを車が通ってぐちゃぐちゃになって、その後晴れてその形のまま固まって道になるので、道路は凸凹だらけ。そこを12人乗り程度のミニバンで走ったのですが、ウガンダの人はその道を普通の道を通るように通り抜けます。まるでジェットコースターのようなようでした。ジェットコースター好きの私にとっては、とても楽しいひと時でした。

安西由記

私たちがフィリピンで活動していたビッグバナナ・バラン街には色が変わる川が流れていました。近くに染色工場があり、そこから廃水がそのまま川に流れてきます。さっきまでピンクだったのに、それが紫になり、次の日は青だったり黄色だったりしました。そして、そこにはたくさんのプラスチックゴミ（お菓子の袋など）が浮いていました。私たち

と一緒にいった日本人のメンバーの一人がお菓子をもらい、そのゴミをどこに捨てればよいか尋ねると、子供が「川に捨てればいいよ！捨ててきてあげる！」と言ってゴミを川に捨ててしまったそうです。別の日に、私たちがワーク中にゴミ拾いをしていると、ある女の子が私に「あなたはゴミ拾いが好き？」と尋ねてきました。私はなぜゴミ拾いが必要なのか、英語の知識が足りなくて、あまりちゃんと伝えることができませんでした。結局その子は手伝わずにどこかへ行ってしまいました。やはり、衛生面での教育が足りないのだと感じました。

木下大樹

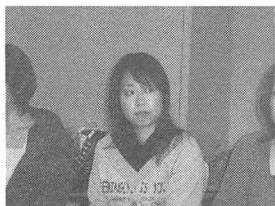
プレゼントを沢山もらったことです。手紙、大切にしていたぬいぐるみ、おいしい食事。ボリビアの人たちは年に2回程しか肉を食べないのに、僕は現地で沢山肉を食べました。本当に僕たちを歓迎してくれました。ボランティア、国際協力は「与えるもの」ではないことを再確認しました。



布施沙希恵（ニューヨーク）

私の印象に残ったことはニューヨークのホームレスの人達です。私たちは、NY de Volunteer という文教大学卒業生である日野紀子氏が立ち上げ、代表を務める団体の協力で、Bowery Mission というホームレスの人達を支援する施設でボランティア活動をしました。私は今までにホームレスの人達をほとんど見たことがなく、ホームレスの人達はただ家も仕事もなく且つ自分では仕事を探さないという勝手な偏見がありました。しかし、Bowery Mission にいたホームレスの人達は仕事を得ようと努力していました。それが私には印象的でした。

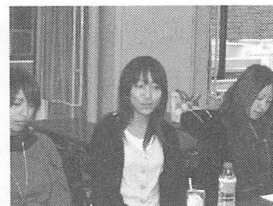
山井めぐみ（後方支援）



学内募金を行っている時、多くの学生が募金に協力してくれました。しかし、こんな悲しいこともありました。ある学生が千円札を何枚か手にしてこちらに向かって来たので募金してくれるのかと思いきや、募金箱に入れる瞬間を友達に写真を撮らせ、その後募金をせずに走り去ってしまいました。この文教大学の中にも、学生の間でボランティアや学生生活に対する考えに温度差があることを実感させられ、一緒に頑張っている仲間、現地で困っている人たちのことを考えると、とても心の痛む思いでした。

今井久美子 (ボスニア・ヘルツェゴビナ)

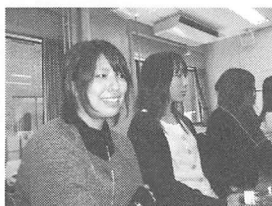
プリエドールでのホームステイ先の出来事が印象に残っています。シャワーを使う時に十分にお湯が出なかったり、水しか出なくなったりすることがありました。また、トイレの水の流れが悪く、洗面所の水が出なくなったこともありました。首都のサラエボではインフラがだいぶ整備されていましたが、首都から離れたところではまだまだ整備されていないことを実感しました。ホームステイ先のお母さんに「水がここでは問題なの。日本ではそんなことはないでしょ?」と言われたことがとてもショックでした。



戸谷帆奈未

一番印象に残ったのは、フィリピンのスラム街・ビックバナナバラン街にある貧富の差を隔てる壁です。貧しい人が上って来ることができないように、壁の上にはガラスの破片が突き刺してありました。私はとても驚きましたが、フィリピンの人たちにとっては当たり前で、壁に驚く日本人に驚いていたほどでした。

横澤麻友



紛争中对立していた二つの民族が一緒に野菜を作って生活しているというサラエボの民族融和のためのコミュニティガーデンに行きました。そこで生活する人たちは「紛争前は一つの大きな家族だったのだから、終わった今、一緒に生活することは自然なこと」と言っていました。それに対して政府の指導者の中には「独立するために紛争が起こったのだから、民族融和なんてありえない」と言っている人もいて、政府と民衆の両者の意識の違いが印象的でした。

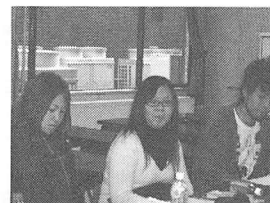
苦勞したこと

司会

それでは次に、苦勞したことを話してもらいましょう。これは経験している最中は大変苦しいことですが、後になると、実はこういう経験が非常に貴重であった、自分を成長させたと思える場合が少なくありません。何でもいいので、率直に話してもらいたと思います。中には今思い起こせば、大変だった話が面白かったという楽しい思い出になっているものもあるかと思います。

布施沙希恵

私が一番苦労したことはボランティアのために準備していたものを急遽変更しなければならなかったことです。私たちはニューヨークで先に話に出たABCというNPOで、病気にかかっている子供達が教育の面で特別なケアを受ける、また貧困や家庭問題により



家族から十分な教育・保護を受けられない子供達が学ぶ場所にボランティアとして日本文化の紹介をしに行きました。私たちはそのボランティアをする前日に、NY de Volunteerの日野氏から前回のボランティアで紙芝居を子供たちにしたところ不評だったこと、紙芝居をするのであれば少し工夫が必要だということを聞かされ、翌朝メンバー全員で集まり、急遽紙芝居をクイズ形式に作り直しました。私にとってはそれが一番苦労したことでした。

小山浩太郎

ニューヨークで乗車したタクシーでの出来事です。私達はOCHA(国連人道問題調整事務所)に所属する国連職員の田瀬和夫氏の家に招かれ、お酒を交えながらお話をしていました。深夜3時ごろになったので、そろそろ宿舎に帰ろうということでタクシーに乗りました。しかし、これが悲劇の始まりでした。運転手に行き先を告げると、返ってきた言葉は聞き取れないほどの強い訛りの英語。とりあえず、住所が書いてある紙を渡し、タクシーは出発しました。大体30分程で着くはずなのですが、30分を過ぎても到着する様子もなく、見たことの無い風景ばかりでした。異変に気づき、運転手にちゃんと目的地に向かっているのかを尋ねても、返ってくる言葉は意味不明。何度も何度も同じ高速道路を回り、明らかに道に迷っているようでした。料金メーターも上昇していくばかりでした。次第に運転手がイライラして興奮しているのか、声を荒げることもありました。車内はとても危険な雰囲気でした。それでも1時間ほどかけて、やっと宿舎のホステルに到着しました。運賃も通常の料金の2倍程高い金額を請求され、散々でした。

もう一つは、マンハッタンで宿泊したホステルでお湯が出なかったことです。シャワーを浴びようとお湯の蛇口をひねったのですが、出でるのはギンギンに冷えた水でした。フロントにそのことを伝えたのですが、すぐには直らないとのことで、仕方がなく我慢して冷たい水で頭を洗い、水で濡らしたタオルで体を拭きました。ただでさえ寒い3月のニューヨークで、凍えそうでした。

岡本大夢

お金のやりくりです。基本的に日常の生活費は奨学金から出しているのですが、ボスニアに

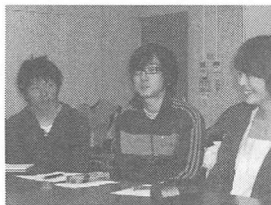
行くためのお金をすべて自分でやりくりするのは大変でした。僕はアルバイトで塾講師をしているんですが、週3～4回、多い時で週6回やりました。食事は自炊して外食は避けました。昼は弁当を作っていて、朝の弁当作りもちょっとした楽しみでした。

次にシャワー事件です。ホームステイ先で夜中にシャワーの栓が壊れて水が止まらなくなり、みんなで一生懸命止めようと頑張りました。ついには中村先生も起こして、やっと見つけた工具で何とか止めることができました。騒ぎでホームステイ先のおばさんも起きだしてきました。大変だったけど、こういう失敗談も、今では楽しかった思い出の一つです。

山崎裕惟

私はトマトが好きではないため、レストランでの食事のときに少し困りました。深いお皿にトマトときゅうりを角切りにしたものを入れ、その上からチーズをどっさりのせたシヨプスカ・サラダをしばしば食べることになりました。トマトが小さく切られてあるので食べられると思っていたのですが、意外とトマトばかりを残してしまいました。こんなにおいしいのになぜ食べられないのかと、一緒にボスニアへ行った皆に批判されてしまい、トマトが食べられたらなと心から思いました。

二ノ宮裕史（ウガンダ）

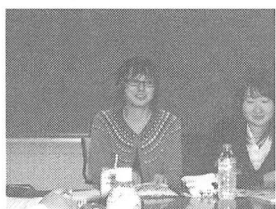


僕たちが滞在していた地区は水道が通っていませんでした。生活に使う水はすべて政府が作った井戸から汲んで運んできます。その仕事は子供がする仕事で、井戸の周りにはタンクを持った子供が大勢いました。水を汲み1 kmぐらい離れた家に20 kgぐらいのタンクを運びます。家の遠いところは5～6 km離れたところから来るそうです。朝晩その仕事を家族のために文句も言わずしている子供が印象的でした。そんな大切な水を僕たちの洗濯、食器洗い、食事、風呂用に使わせてもらいました。お風呂に使うための水は20ℓのタンク3つに、お湯のタンクが1つ用意してくれてそれを桶に混ぜて使うような形でした。お湯は現地の方が沸かしてくれました。向こうの人たちは風呂に入る習慣があまりなく、僕たちが風呂に水を使うのを見て、不思議そうな顔をしていました。それに加えて僕は参加したメンバーの中で年長の部類に入るので、なるべく水を使わないようにしていました。日本に帰ってきて電車に乗っていると周りの人がちらちらこっちを見てくるのが気になりました。何でかなと思い実家の近くの駅で母親の迎えの車に乗ると、母親に「う～ん、裕史、ちょっと臭うよ」と言われました。それで電車の中での周りの人の様子が全部理解できました。

熊手智恵

私にとって大変だったことはワークです。私たちはワークとしてムコノ地区にある建設途中の職業訓練学校の土台作りをしたのですが、それが本当に大変でした。最初の2～3日はみんな一列に並びバケツリレーのようにレンガを運ぶ作業。残りの日はクワとスコップを使い土台のため穴を掘る作業でした。特に穴掘りは重労働で、堅い粘土質の土をクワとスコップだけで掘る作業で体中筋肉痛になってしまいました。日本人は大変そうに作業をしていましたが、現地の人々は軽々と穴を掘り進めていました。ウガンダ人と日本人の身体能力の違いを目の当たりにしました。

戸谷帆奈未



人に思いを伝えるということの難しさです。ボランティアズの写真展示のとき、お客さんに「君たちはボランティアをしているというよりお世話になっていることのほうが多いんじゃない？」と言われてしまいました。そうじゃないって、もっと自信をもって言いたかったです。形があるボランティア活動を紹介するのは簡単ですが、現地の人たちの精神的な支えになったことを理解してもらうことはとても難しいと思いました。

安西由記

私は事前の募金活動とフリーマーケットが大変でした。荷物がたくさんあり、車に荷物を積み込んでフリーマーケット現場に行っていたのですが、なかなか人が来ず、駐車禁止で怒られ、誰かが来るまで周辺を走って時間を潰した日もありました。また、現地へ行く資金は、全てアルバイトで貯めました。フィリピンはそんなに物価は高くはないですが、13連勤するなど、たくさんアルバイトをしました。

木下大樹

僕は言葉に困りました。英語もそうですが、ボリビアではスペイン語が話されていて、現地の人たちや子供たちとコミュニケーションを取るのに苦労しました。

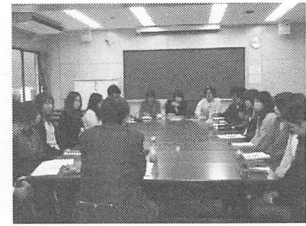
加藤智聖（後方支援）

募金活動を始めてすぐの頃はなかなか人が集まらなかったり募金活動に慣れていないのもあって、声が出なかつたりして苦労しましたが、これもいい思い出になりました。

総括

司会

本当は暴露されたくない話もあったようです。それにしても、深夜のニューヨークのタクシーはいただけません。当時も厳しく注意しましたが、人の好意に甘えて自分の居場所や身分を忘れていたというのは大失態です。無事だったから良かったものの、何かあったら大変なことになっていました。解散後先生の目の届かなくなっただけからはずいぶん気が緩みますが、最後の夜などというのは本当に注意が必要です。徒然草に「過ちは易き所にてこそあれ」と戒める場面があります。また「百里の道も九十九里をもって半ばとす」という言葉もあります。帰国、帰宅するまで絶対に気を緩めてはいけないという教訓で、後輩たちへもいい警告になったと思います。それでは最後に一言ずつ総括の感想を述べてもらいましょう。



ボスニア・ヘルツェゴビナ

岡本大夢

一言で言うと「人との関わり」という面でとても成長できたと思います。ボランティア活動を通じて校外の方と接する機会が多くありました。人との関わり方・接し方というのはとても難しいものだなと実感しました。また、代表としてメンバーに何かをしてもらいたいことを伝えることの難しさを感じました。どう伝えたら分かってもらえるか、どうやったら共通の目標・気持ちを持って取り組めるか、戸惑いの連続でした。最後にみんなで同じ達成感を味わえたことは大きな感動でした。

また、将来の進路に関しての思いを改めて強く感じました。国際協力の現場でその道のプロとして働く、世界の平和構築のための一助となるという気持ちがさらに強くなりました。

山崎裕惟

文教ボランティアズという団体に所属できて、「世界」というものを知りました。テレビやインターネットなどでは先進国の話題が多く取り上げられ、開発途上国についてはあまり多く見る事ができないと感じています。しかし、私自身もボスニアへ行き、ボランティアズのメンバーたちもそれぞれいろいろな国へ行き、自分の目でそれぞれその国の状況を見る事ができたと思います。やはり、その国に行ってみないと状況もわからなければ、その国にはどんな助けが必要なのかもわからないなと思いました。ボスニアに行って心からよかったと感じています。

横澤麻友

ロマの人たちの家を訪問した日の夜、急遽依頼されたロマへの支援についてどうするか、みんなで話し合うことができました。現地を見たことを参考にしながら、支援をするかしないかについて、大学で学んでいる知識もフル活用して意見をぶつけ合ったことは、現地に来ているからこそという充実感がありました。それまで現実味のなかったことを実際に見て、内容の濃い話し合いができたので、本当に行ってよかったと思いました。

今井久美子

ボランティア活動を通して、国際協力やボランティアというのは相手のことをきちんと理解し、相手の立場になって考えることが大事であると改めて実感しました。何かをしてあげるのにも、相手のことを理解し、ニーズに合った援助をしなければ意味のないと思います。そうすることによってお互いの信頼関係も築けるし、持続した活動を続けられるのではないかと思います。



フィリピン

戸谷帆奈未

最初は不安なことがたくさんありました。危険な目に遭わないか、体調を崩さないか、とか。親にも同じことを言われました。けれどフィリピンから帰ってきて逆にとても生き生きしていると言われました。

安西由記

私は日本国際飢餓対策機構との出会いがとても大きかったです。フィリピンから帰国後も JIFH のいろいろな講演、イベントに参加しています。そのことで飢餓について考えるようになり、マイ箸やエコバックを持つなど、自分の生活を見直すきっかけになっています。

目黒拓也

今までは世界の情報が目や耳を通して文字や音声の主だったので、実際に世界の現状を見てみたいと思い今回のプログラムに参加させていただきました。しかし、生で見て、感じた世界は今まで自分が思っていたよりももっとひどい現状で、自分の甘さや無力さを改めて思いしらされることになりました。そして、これからの自分の生活を変える有意義なものであったと思います。

ウガンダ

熊手智恵

私はこの半年間を通じて本当にたくさんのことを学びました。その中でも特にボランティアという言葉そのものについてよく考えました。ボランティアと聞くと協力や募金、支援などの言葉が思い浮かびます。しかし、ボランティアの本当の意味は自ら率先して動くということです。文教ボランティアズではたくさん率先して動いたつもりです。自ら率先して行い、人にも喜んでもらえるなんて、ボランティアって素敵なことだと思ったりもしました。さらにお手伝いをする立場にも関わらず、本当にいろいろな人々からたくさんものを頂きました。優しさ、笑顔、愛、喜び、感動などです。ボランティアズをしていて良かったと思う瞬間です。

二ノ宮裕史

春のセメスターはすべてをこのワークキャンプにかけていました。ウガンダを選んだ理由は、アフリカは世界でも貧困で苦しんでいる国が多い地域で、その現状を直接肌で感じたいと思い、ウガンダに決めました。実際にウガンダに行き現地の人と交流し、直接話を聞き、テレビや雑誌からしか知らなかった貧困を今までより身近に感じられるようになりました。

ボリビア

木下大樹

得たもののなかで一番大きいものは「きっかけ」です。海外へ行くきっかけになったし、ボランティアに従事し、国際協力のあり方について考えるきっかけになりました。今は、自分に何ができるか、何をしていくかが、僕の考えるところです。



ニューヨーク

小山浩太郎

このニューヨーク研修を通して、団体行動の難しさ、協力することを学びました。そして、二つのボランティア活動を通して、アメリカの社会問題のほんの一端であるけれども、垣間見ることができました。それは、メディアを通して加工されたものではなく、問題が起こっている現場に自分の身を沈め、自分の目を通してです。そして、社会問題というものを国レベルではなく、自分の身近なレベルで捉えられるようになったことがこの研修の意義であったと感じます。

布施沙希恵

私はニューヨーク研修に行く前までは、ボランティアの経験は中学生の時の老人ホーム訪問、町の清掃しかありませんでした。ボランティアというと自分が行ったもののイメージしかなく、誰かのためにするものだと思っていました。しかし、このニューヨークでのボランティア活動を通して他の誰かのためだけでなく、自分のためにもするものであると分かりました。ABCでの日本文化紹介をすることにより、日本文化を改めて知ることができ、いろんな新しい知識を得ることもできました。また、今まで夢のまた夢でしかなかった海外での就職も視野に入れるようになりました。

後方支援

菅原実香

私は春のニューヨーク研修に参加しましたが、本当に貴重な経験をしたなと思いました。ボランティア活動ってこういうものなんだと知ることが出来たし、そこで経験したことをきっかけに何か行動しようという気持ちが生まれました。そういう意味では自分にとって大きなきっかけになりました。

加藤智望

とても個人的な話なのですが、私は今まで文教大学に来たくて来ていたわけではなかったため、大学生活が全く充実していませんでした。でも、ボランティアズの活動に参加して、初めて大学生活が充実してこの大学に来た意味があったのかなと思いました。

大川友理恵

自分は文教ボランティアズの活動に中途半端にしか関わっていませんでした。みんなの話を聞いていても人ごとにしか聞こえませんでした。もっと参加すればよかったと思いました。だから、来年現地に行って参加することができれば、感じることも違うのではないかと思います。



山井めぐみ

この半年間、文教ボランティアズに参加してきて学んだことは、ボランティア活動を自分の私生活の中でどこに位置づけるかということでした。ボランティア活動に参加したいという気持ちは持っていますが、他の勉強やアルバイトなど自分の生活まで変えるべきなの

かと日々悩みました。活動への参加はあまりできませんでしたが、これからの学生生活において、ボランティアの優先順位をはっきりさせるべきだなと深く考えさせられた半年間でした。

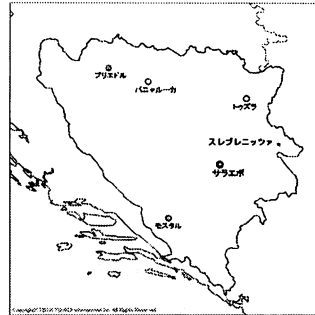
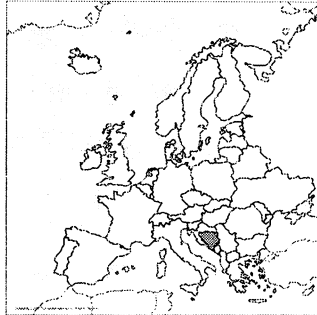
司会

今回の様々な体験、教訓をこれからの学生生活、その後の進路で大いに生かしてもらえるよう願っています。また国際協力は一時的なものではなく、継続こそ命です。私は常々国際協力を磨き支えるものに三つのビタミン C があると言っています。ひとつは、Continuity（継続性）、2番目は Consistency（一貫性）、そして最後の C は Compassion（相手の立場に身を置いて考える同一性）です。直接国際協力の実務をする人だけが国際協力者ではなく、さまざまな場で三つのビタミン C を大事にできる人こそ国際協力者だと思います。ぜひ今後を生かしてください。

—ボスニア・ヘルツェゴビナ活動報告—

岡本大夢 山崎裕惟 今井久美子 横澤麻友 山本記洋子(文学部英米語英文学科3年)

私たちは2007年8月22日から9月1日までの10日間、ボスニア・ヘルツェゴビナでボランティア活動を行いました。



<ボスニア・ヘルツェゴビナ概要>【参照：外務省ホームページ】

言語：ボスニア語、セルビア語、クロアチア語

宗教：イスラム教、セルビア正教、カトリック

GDP：114億ドル [181カ国中103位] (2006年、IMFより)

<歴史と現状>

旧ユーゴスラビア連邦の崩壊が進む中、1992年4月、ボスニアの独立を巡って民族間で紛争が勃発し、3年半以上にわたり各民族がボスニア全土で覇権を争って戦闘を繰り返した結果、死者20万、難民・避難民200万と言われる戦後欧州で最悪の紛争となりました。1995年の Dayton 合意により戦闘が終結し、ボスニア・ヘルツェゴビナはムスリム系(ボスニアク)及びクロアチア系住民が中心の「ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦」と、セルビア系住民が中心の「スルプスカ共和国」という、2つの主体から構成される1つの国家になりました。それぞれの主体が独自の警察や軍を有するなど、高度に分権化されています。民族対立は完全に解消されたわけではありませんが、「欧州大西洋機構への統合」、即ち EU 及び NATO 加盟は、民族を超えた共通の目的であり、ボスニア政府はこの目標に向かって国際社会の支援を得ながら諸改革に取り組んでいます。国内の治安は比較的安定してきていますが、生活区域内には地雷危険地域もまだ多く存在し、経済発展を阻んでいます。首都サラエボにはブランドショップがあるなど、都市の生活水準は日本とあまり変わらない状況だと言えますが、都市以外の地域では道路が整備されていないところが多いなど、まだこれからという課題は多く残されています。

<活動内容>

8月22日 サラエボ (Sarajevo)

・サラエボ空港到着

夜にも関わらず、中村健史氏（在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館・専門調査員）が出迎えてくれました。

8月23日 サラエボ

・日本国大使館訪問

壘二夫（もたいふたお）氏（在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館・臨時代理大使）や上田晋氏（在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館・一等書記官）、中村氏とボスニアの印象などを話しました。

・民族融和のためのコミュニティガーデン訪問

大塚敦子氏（在サラエボ・フォトジャーナリスト）と合流し、民族融和のためのコミュニティガーデンへ。大塚氏は紛争地などで写真を撮り、現地の人々と交流して本などを出している方で、最新作の『平和の種をまく』の舞台になったのがこのコミュニティガーデン。このガーデンは、2000年に「アメリカン・フレンズ・



サービス・コミッティ」というクウェーカー教徒(キリスト教の一派)の団体の支援によって民族間の和解と紛争で傷ついた身体と心のセラピーを目的として設立されました。ここでは、イスラム教徒のボスニアックとセルビア系の人たちがかつて対立した民族の違いを乗り越えて一緒に野菜を栽培することで日々の食料を自給。今ではその数は16個所に増え、ボスニア・ヘルツェゴビナ全土に広がっています。和気あいあいとしたとてもいい雰囲気のガーデンでした。

・地雷探知犬訓練センター見学

地雷を探知する犬を訓練するセンターで、NPA (Norwegian People's Aid) というノルウェーのNGOによって運営されています。生後2ヶ月の子犬の時から成犬になるまでたくさんのトレーニングをつみ、ボスニア国内だけでなくカンボジアやエチオピアなど世界中で活躍しています。地雷探



知犬は麻薬探知犬よりも高い能力が必要で、ベルギーシェパードという種類の犬が一番適しています。血統によるところが80%なので、いかに繁殖させられるかが鍵。火薬のにおいを嗅ぎ当てることによって、地下1.5mの地雷も見つけられます。

・地雷除去センター訪問

NPA が運営しているセンターで、地域に根ざした地雷除去の活動をしています。ノルウェー政府が全額支援しています。ボスニアの国土の3.68%に地雷が埋まっている可能性があり、これは、100万人以上の人々が地雷の被害にあう可能性を示しています。社会復興と精神的不安の解消には、地雷除去が大きな課題です

8月24日 プリエドール (Priedor)

・ハンバリネ (Hambarine) ・ユースセンター訪問

このセンターは帰還難民が多い村にある子供のためのセンターで、毎年募金活動で集めた資金によるささやかな支援を行うとともに、子供たちと交流をするために、2005年から文教ボランティアズが訪れているところ。大使館から借りた日本の伝統的な遊具で、センター子どもたちと遊んだり、歓迎の歌を歌ってもらったりしました。わなげや紙風船が人気で、有意義な交流ができました。

8月25日 プリエドール

・ルビア (Ljubija) ・ユースセンター訪問

C I S V (Children's International Summer Villages) というイタリアのNGO団体が支援している紛争被災家庭の子供たちのためのセンターです。ここでもセンターの活動維持のための資金として募金活動で集まった募金を手渡しました。日本から持っていった半紙や筆、墨汁を使って現地の子どもたちの名前を書くなど習字遊びをやりました。



また、ハンバリネ同様、わなげやけん玉、だるま落としなどで、日頃楽しみの少ない子供たちに日本の遊びで楽しんでもらいました。

・ロマの居住地区

ロマの居住センターへ行き、少数民族のロマの人たちの暮らしぶりがわかるよう、家にも案内してもらいました。ロマの人たちは、民族的な差別やボスニアの失業率の高さの影響で職がなく、健康保険もないなど、他の民族に比べて貧しい暮らしをしていました。募

金で鉛筆などの学用品を贈りましたが、鉛筆があってもノートがないことが分かり、急ぎよノートも現地調達して贈りました。

8月26日 ビハーチ (Bihac)

ボスニア西部の都市で、紛争中の国連指定安全地域の一つビハーチへ行く途中の道路の両端には、地雷が埋められている可能性があることを示す標識があり、まだまだ地雷が埋まったままになっている個所があるのを実感しました。ビハーチの町では、紛争で壊された教会や古城を視察しました。

8月27日 プリエドール/サンスキーモスト(Sanski Most)

・LDA (Local Democracy Agencies) とのミーティング

この団体はプリエドールを中心に活動しており、2000年からイタリアのトレント市の支援で活動が始まりました。主に民族和解と失業者の自立という2つの目的がありますが、大きな目標は町を民主化することです。イタリアなどの民主化モデルを見せ、自分たちの考え方を押し付けずに物の見方をアドバイスしています。また、現地の人にとって本当に必要なものを調査して、支援を進めているそうです。



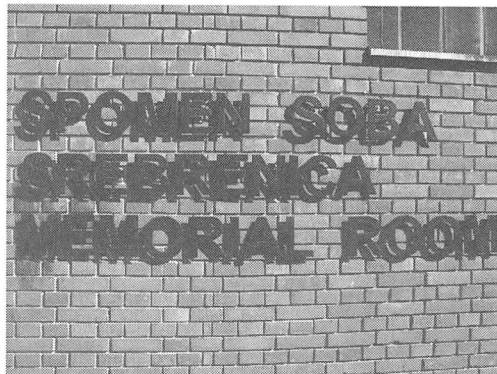
・サンスキーモストの遺体確認所見学

体育館のように広い遺体確認所内は白骨化した遺体が千体近く、身元確認を待っていました。遺体のほとんどが一般人のムスリム人で、これまで3500体の身元が確認されています。しかし、まだDNA鑑定中のものや遺骨が十分に集まっていないものもあり、未だ家族のもとに帰ることのできない状態です。紛争中、遺体は虐殺の事実を隠すために何度か埋めなおされており、そのため、服が入れかわったり、骨の欠けてしまい、身元確認を困難にしています。センターの遺体は埋められていた時の服や髪の毛などの遺品と共に並べられて、家族が確認に来た時の手がかりになるようにしています。衝撃的だったことは、どうやって殺害されたかが遺体を見て分かったことでした。首の骨にある傷はナイフで殺害されたため、骨にあいている穴があれば至近距離から銃で殺害されたという証拠になるのです。

8月28日 スレブレニツァ(Srebrenica)

・バッテリー工場跡（メモリアルルーム）の見学

スレブレニツァは国連が安全地帯と定め、国連平和維持軍の一部として派遣されたオランダ軍が守っていました。そのため、オランダ軍に助けを求めて周辺の村からも多数の人が逃げてきました。しかし、オランダ軍はセルビア人勢力に屈して、基地であるバッテリー工場内に避難していたムスリム人をセルビア人側に引き渡してしまい、女性



と子供はこの地区から追放される一方、男性は拷問のうえ、銃殺されることとなりました。ボスニア戦争終結のためにアメリカが本格的に介入する元となった有名なスレブレニツァの虐殺事件です。これは第2次世界大戦中のユダヤ人虐殺事件以来、戦後ヨーロッパで起きた最も悲惨な非人道事件として知られています。

・メモリアルルーム

バッテリー工場の建物が修復されて、紛争を偲ぶメモリアルルームが作られており、ボスニア紛争の記録映像を見ることができました。当時の映像が映されているもので、実際にボスニアで見ることによって、より生々しく感じました。

8月29日 スレブレニツァ

・“Sara” association とのミーティング

市民会館にて、“Sara” Association という女性と青少年の自立を推進している団体の方たちのミーティングに参加しました。1997年に設立し、“Sara”と名付けた理由は、この名前は一般的な女性の名前で国際的にも知られているからだそうです。ドイツのNGOが組織的に支援しているほか、国籍など関係なしにさまざまな国の人たちが支援してくれています。障害教育や麻薬問題に関する教育、市民の人たちが自分たちでコミュニティを作れるような企画をしています。また、民族間の対話をする場を設け、和解から理解へとつながるような企画もしているそうです。

・メモリアルパーク

スレブレニツァ事件で死亡、行方不明になった男性は7000人以上。これまでほぼ3000遺体が身元確認ののち家族に返されてメモリアルパーク（ムスリム集団墓地）に埋葬されています。広大な墓地は身元確認が進めば、さらに拡大されることになっています。メモリアルパークの中には、「全能の神に祈る 悲しみは希望に 憎しみは正義を望む

心に 母の涙は祈りに変わることを スレブレニツァの地獄は世界のどこにも、だれにも繰り返されてはならない」(生田祐子訳)。ボスニア語、アラビア語、英語で書かれた祈りの碑がありました。他の石碑には、「8372・・・」と刻まれてあるものもあり、これは今までに確認された虐殺を受けた人の数を表しています。「・・・」はこれからも増えるということを示しており、実際に毎年メモリアルパークの墓は増え続けています。



8月30日 サラエボ/モスタル(Mostar)

・サラエボ大学訪問

アズラ・ハジアフメトビッチ教授(サラエボ大学経済学部教授、欧州議会ボスニア・ヘルツェゴビナ代表)からボスニアの現状についてブリーフィングを受けました。日本から各自が持参した雑誌や漫画、新聞を提供しました。大学内を見学したのですが、私たちが予想していた以上にさまざまな設備が整っており、とてもきれいな学校でした。同教授は2007年6月に文教大学に来訪、特別講演をしてくださったボスニアでは非常に有名な学者であり、政治家です。

・世界遺産「モスタルの橋」見物

世界遺産である「モスタルの橋」を見に行きました。かつて、ムスリムとクロアチア人のコミュニティは川を境界に分けられていました。紛争でこの橋は破壊されましたが、2004年に修復され、現在世界遺産となっています。白い石が印象的なきれいな橋でした。



8月31日 サラエボ市内紛争の傷跡、日本国大使館訪問

・サラエボ市内(オリンピックスタジアム、old town、空港トンネル)

空港トンネルは紛争中、安全地であるサラエボ空港の南までセルビア軍に見つからずに行けるよう、サラエボのムスリム人たちによって掘られたもの。トンネルの中は非常に狭く、高さは1.6mほどで、下にはトロッキのレールが敷かれていました。雨が降ると水が腰の高さまでたまったそうですが、食料を始めさまざまな物資の輸送と人の移動にはなくてはならない生命線でした。今は小さな戦争記念館の役割を担っています。

1984年に開催されたサラエボオリンピック
(冬季)のメインスタジアムは現在紛争で亡くな
った方々の墓地になっています。

・日本国大使館訪問

大使館を再度訪問、曇（もたい）臨時代理大使
と懇談、ボスニアでの活動の報告をしました。



9月1日 現地解散

—フィリピン活動報告—

安西由記 戸谷帆奈未 目黒拓也

私たちは2007年8月2日から14日までの12日間、日本国際飢餓対策機構（JIFH）の活動に参加し、フィリピンでボランティア活動を行いました。

フィリピンの人々は陽気で明るく、優しく、歌と踊りが大好きです。私たちが行ったスラム街の子供達は元気に走り回っていました。そして雨のときには私たちに傘を一生懸命差してくれました。

<フィリピン概要>

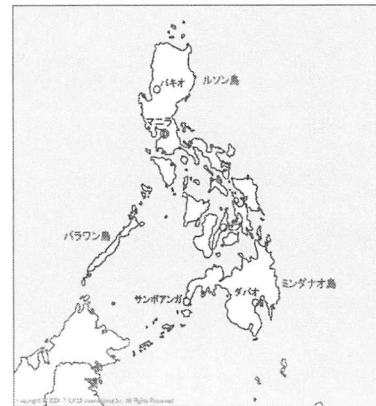
言語：タガログ語、フィリピン語、英語

（その他80前後の言語がある）

宗教：キリスト教（83%）、イスラム教（5%）

各目GDP：1,169億ドル

（2006年、中央銀行、国家統計局等）



<活動内容>

ワーク

スラム街地域ではバスケットコート修理、七つの里子の家の修理と建て替えなどを行いました。里子の家の状態はひどいところでは今にも屋根が崩れそうで、においもひどく、衛生的にとってもひどい状態でした。フィリピンの人はゴミを平気で道に捨ててしまうので私たちはゴミ拾いも行いました。また、子供たちと遊んだり子守りをしたりしました。



リコーダー教室

フィリピンの子供達にリコーダーを日本から39本持っていきました。けれど子供たちはリコーダーに初めて触るため、吹き方がわかりませんでした。そこで私たちはリコーダー教室を開き、子供達に吹き方を教えました。初めて吹くリコーダーに戸惑いながらも子供たちは一生懸命練習していました。最後の日、子供達は覚えたてのリコーダーで「カエ

ルの合唱」の輪唱をしてくれました。私たちが帰国した後もリコーダー教室を開いてくれるそうです。

私たちはフェアウェルパーティーのときに、カントリロードのリコーダー三重奏をフィリピンの子供たちにプレゼントしました。



スラム街の様子

貧富の壁

私たちが行ったビックバナナバラ街のスラム街で一番衝撃を受けたのは長い壁です。この壁は裕福な人たちが作った、貧富の差を分ける壁なのです。壁の上には貧しい人たちが上ってこられないようにガラスの破片が突き刺してありました。けれどスラムの人々はこの壁のことを気にしていません。むしろこのことに驚いていた日本人に驚いていました。「スラムの人たちは貧しい」。私たちはこのようなステレオタイプを頭の中に植えつけているのではないのでしょうか。けれどそんなことはありません。スラムの人たちは明るく、のびのびと生活しています。家がひしめきあっているので近所の人や友達にすぐに会えます。夜はみんなで笑って楽しく踊っています。私たちが見たのはそんな幸せそうな生活でした。

《最後に》

ボランティアとは、そして私たちが出来ること

私たちはボランティア活動をするためにフィリピンに行きましたが、実際に私たちが出来ることはとても小さなことばかりでした。実際、バスケットコートや家の修理はほとんど現地の修理専門の人が中心となって行っていました。けれど彼らと一緒に笑ったり泣いたり、そしてお互いを思いやること。これは私たちでなくては出来ないことです。ボランティア活動は決して目で見える結果だけのものではありません。現地の人たちの支えること、励みなること、それが私たちの一番のボランティア活動なのです。



—ウガンダ活動報告—

熊手智恵 二ノ宮裕史

私たちは2007年8月16日から29日までの13日間、日本国際飢餓対策機構（JIFH）の活動に参加し、ウガンダでボランティア活動を行いました。

参加したメンバーは文教大学から私たち2人、他大学から1人、保育士1人、高校生1人、主婦1人、夢追い人2人、JIFH 大阪事務所スタッフ2人、JIFH 在エチオピア・ルワンダスタッフ各1人の合計12人です。

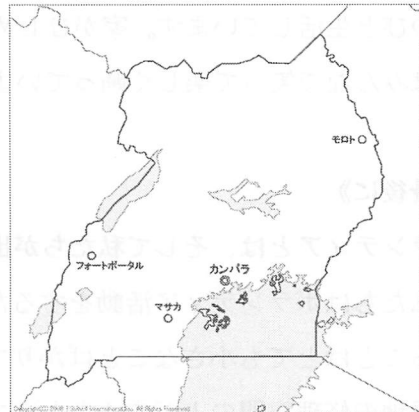
学校建設予定地はまったく何も出来ていませんでした。雑草が抜いてあり、アフリカ特有の赤い土がむき出しになっている土地だけがありました。ウガンダはキリスト教徒が国民の80%以上を占めています。私たちが滞在したムコノ地区もキリスト教が広く信仰されていたので日曜は休日でした。

<ウガンダ概要>

面積：24.1 万平方キロメートル（ほぼ本州大）

人口：2,780 万人

宗教：キリスト教（60%）、伝統宗教（30%）、
イスラム教（10%）



<活動内容>

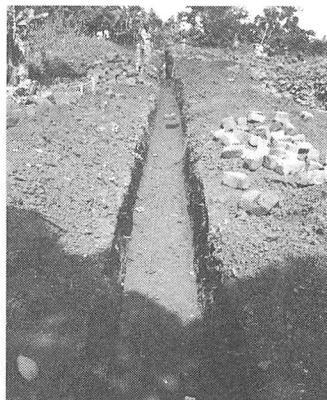
レンガを運ぶ

まずは建材のレンガを30メートルぐらい離れたところからバケツリレーの要領で運びました。レンガはあらかじめ現地の方が作ってくれていました。はじめ、私たち日本人は固まって作業を行っていましたが、途中から近所に住んでいる人が自分の畑の手入れが終わったからと手伝いに来てくれました。現地の方が間に入り一緒にレンガを運びました。四日間で約五千個のレンガを運びました。



穴掘り

ありったけのレンガを運んだあとは基礎のため穴を掘る作業をしました。これが一番つらい作業でした。機械を使うとお金がかかるため、くわとスコップだけで掘っていくのですが粘土質の土地はかなり硬く掘りにくかったです。加えて夜に雨が降ることが多かったため、その次の日はさらに硬くなっていました。慣れない作業で手にマメができ、なかなか作業が進まないこともありました。けれども、現地の人が始めるとさくさく進みます。それを隣で見つめていることもありました。3日間みんなの頑張りで掘り続け、やっと長方形の建物の長辺を1つ掘り終えました。



交流

同じムコノ地区にイギリスから JIFH のワークキャンプに参加している方々がいました。そのイギリスチームと2度ほど一緒に夕食を食べました。彼らは2週間滞在し、教会を一から造り完成させることが目的でした。イギリスと日本から来た人々がウガンダの人々のために活動し、とてもいい経験になりました。

コミュニティ訪問

滞在中に近くのコミュニティを訪問する機会が何度かありました。どのコミュニティの人々もみんな温かい笑顔で迎えてくれました。その笑顔とは裏腹に貧しいため、色々な困難があるとも話してくれました。家族のために子供たちは働かなければなりません。勉強をしたくてもできない、遊びたくても遊べない現状があります。それでも一番明るい笑顔を見せてくれるのは子供たちでした。

—ボリビア活動報告—

木下大樹

私は2007年8月16日から29日までの14日間、日本国際飢餓対策機構（J I F H）の活動に参加し、ボリビアでボランティア活動を行いました。

雲ひとつ無い青空、連なる山々、澄んだ空気。日本から約24時間かけて向かった地球の裏側には、標高が優に3000mを超える世界が広がっていました。地下資源が豊富なためか、ボリビアの人々の生活は豊かであるように思えます。しかし、彼らの生活環境はまだまだ改善の余地があります。例えば、学校や先生の数の不足や、栄養のある食事を十分に取る知識不足などです。

<ボリビア概要>

言語：スペイン語（他にケチュア語、アイマラ語）

宗教：カトリック教（国民の95%以上）

産業：農業（大豆、砂糖等）、鉱業（亜鉛、錫、天然ガス等）が中心（一次産品への依存率が総輸出の8割を占めている）



<活動内容>

チャラモコ村 (Charamoco) の学校のトイレ建設

・なぜ学校のトイレ建設？

学校は現地の人々にとってとても重要なものです。学校へ子供を通わせるために、学校があるコミュニティへ引っ越す人たちも少なくありません。小学生から高校生までが通うこの学校では、不衛生な簡易トイレしかありませんでした。そこで、清潔な水洗トイレを早急に建設する必要があったのです。



・深さ4mの穴を掘る

今回のワークは基礎工事からスタートしました。

主に行ったのは、トイレの汚水を一時溜め、浄化するシステムを担う穴堀でした。その大きさはなんと直径3m、深さ4m。これをスコップとツルハシだけで掘るといって重労働でした。

・大量の石や砂運び

穴掘りと同時進行で、その穴の壁を作るための石や砂を運ぶ作業を行いました。こちらも重労働で、ブルーシート等を利用して石や砂を担ぎ、100m以上の距離を何往復もしました。



《ワークを通して》

現地の人々は力があり、とても簡単そうに作業を進めていきます。高地であるために息がすぐに上がってしまい、このような作業に慣れていない私たちは作業の効率を考えると足手まといだったかもしれません。しかし、彼らは私たちを温かく迎えてくれました。言葉が通じないながらも心を通わせ、違う国の人間が1つの目標へ向かって協力し、努力していく。これこそが国際協力のあり方の根本であると思います。

チャヤ (Challa) 訪問 (J I F H日本人スタッフ活動地)

チャヤは標高4000m以上、年間平均気温は5℃という大変厳しい環境下にあります。人々はカラフルな民族衣装を身にまとい生活しています。

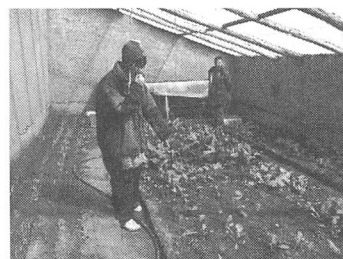
・Welcome Dance!

チャヤ村の学校を訪問した際に、現地の子供達と触れ合う機会がありました。民族音楽の生演奏が鳴り響き、子供達と手をとってダンスをしました。うれしい反面、空気が薄いため、高山病の症状が出て大変でした。



・温室栽培

J I F H日本人スタッフの河合朝子さんの現地での活動を視察することができました。彼女は厳しい環境下でも野菜の栽培ができるように温室栽培という方法を取り、現地に定着させるために活動しています。野菜が栽培できるようになることで、現地の人々の栄養不足を改善することが可能です。



・現地の人たちを巻き込む

現地の人達のために活動しているのに、なかなかその思いは伝わらない。「言っただけでは分からない、毎日の積み重ねによって分かってくれる」。国際協力において、現地の人達の自主性を引き出す必要性を学びました。

ニューヨーク研修

—国連、コロンビア大学交流、ボランティア活動—

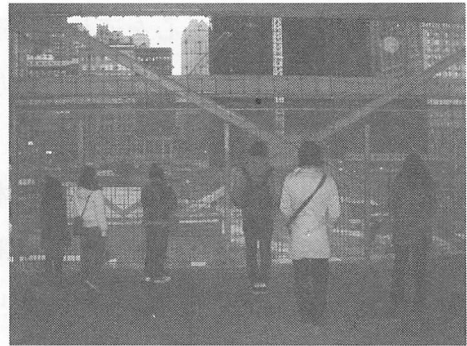
青木槇美（国際コミュニケーション学科3年） 小山浩太郎（同） 塩澤孝哲（同）
杉浦由莉（同） 布施沙希恵（同） 細井寛子（同） 岡本大夢（前述）
菅原実香（前述） 山本記洋子（前述）

私たちは2007年2月28日から3月6日までの7日間、ニューヨークで国連研修やボランティア活動を行いました。

<活動内容>

グラント・ゼロ視察

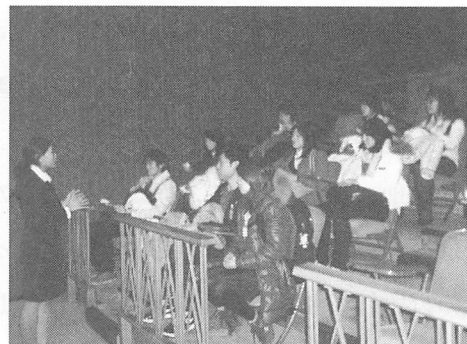
グラント・ゼロを視察しに行きました。世界貿易センター（WTC）ビルが建っていた面影は、そこにはありませんでした。あの何千人もの人が犠牲となったテロの現場だとはすぐには実感することができませんでしたが、みんな黙って立ち尽くし、何かを感じ取っていました。その場にいると自然と涙が出てきました。現在現場はフェンスで囲まれて、メモリアルタワーの建設が始まっています。辺りはとても静かで、重機の無機質な音だけが鳴り響いていました。



その後、日本で折った千羽鶴を贈るために近くの聖パウロ・チャーチへ行きました。ここは9.11のテロ発生時に避難地として使われていましたが、現在では犠牲者へのメッセージや多くの千羽鶴が飾られています。私達は亡くなった方々へ弔いの気持ちを込めて「千の風になって」を歌いました。

国際連合本部研修

ニューヨーク市・マンハッタンのイーストリバー沿いに建つ国連本部での研修は、2日間行われました。まず、192カ国の国旗が私たちを迎えてくれました。そして、正面の入り口付近には「発射不能の銃」という銃口が曲げられた銃のモニュメントが飾ってありました。それは武器のない平和な世界を意味しており、とても印象的でした。入場する際は



とても厳しいセキュリティ・チェックを受けました。そして、今回の国連視察でお世話になった渡部真由美さんにお会いしました。とても凛々しい印象を受けました。渡部さんは、OCHA（国連人道問題調整事務所）の人間の安全保障ユニットに勤務されている方です。まず初めに、国連外交官用食堂で昼食をとりました。そこには、普段私達がお目にかかれないような様々な国籍、役職の人が集まっていました。昼食後は、日系アメリカ人のガイドの方による国連見学を行いました。展示物や資料を見ながら、国連の歴史、悲惨な戦争や貧困の現状に国連がどう関与しているかなどの説明を受けました。また、国連総会議場や安保理会議場なども見学でき、テレビで見たことがある会議場に自分達が立っていることがとても感動的でした。最後は、カフェテリアで渡部氏と私たち一人ひとりの自己紹介を兼ねた懇談を行い、国連研修の1日目を終えました。

2日目は、4人の国連職員の方々からブリーフィングをして頂きました。植木康弘氏（国連広報局）、田瀬和夫氏（国連人道問題調整事務所・人間の安全保障ユニット課長）、川端清隆（国連政治局・安保理担当政務官）、小松原茂樹氏（国連開発計画）の4人です。人間の安全保障や国家の安全保障、貧困などの問題への対応などについて、丁寧に話して頂きました。最後に、渡部氏に国連に入った経緯をお話して頂きました。

NPO Bowery Mission スープキッチン・ボランティア

Bowery Mission は男性ホームレスを対象に、食事・衣服などを提供するだけでなく、様々な訓練を通し、社会復帰を支援している NPO です。ここで私たちはランチを提供するスープキッチンというボランティア活動を行いました。



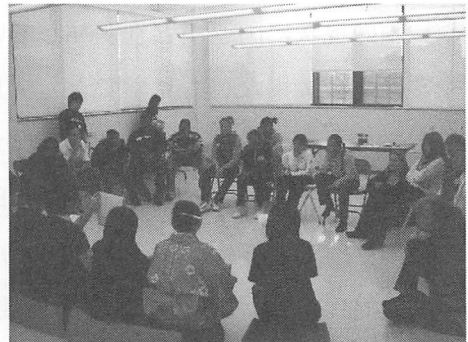
このニューヨーク研修で行った二つのボランティア活動を取り仕切っていただいたのは、文教大学の卒業生で、ニューヨークでボランティア活動を行う NPO 団体“NY de Volunteer”代表の日野紀子氏です。作業を始める前に、ホームレスの方と接するうえでの注意点を教わりました。それは、“Serve like serving a king.”、相手に王様に仕えるように敬意をもって接することです。日野氏の指導のもとで、まず2グループに分かれて寄付された洋服の仕分けや食料の整理整頓を行いました。NPO スタッフと共にお互いの言語（英語と日本語）を教え合うなどの会話をしながら作業を進めていきました。配膳する前に、集まったホームレスの人々に「千の風になって」「Hail Holy Queen」の2曲を披露し、温かい拍手をもらいました。そして、丁寧に配膳した後、彼らと一緒に席について昼食をとりました。その後、

施設内を見学しました。読み書きなどの勉強に使用するためのパソコンが10台ほど設置してあったことが驚きでした。

このボランティアを通して、アメリカの持つ社会問題の一端に触れることができ、とても意義のある活動でした。

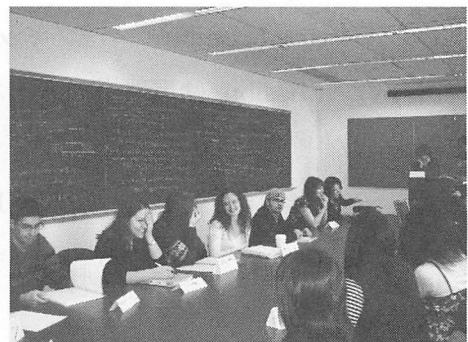
The Association to Benefit Children(ABC)でのボランティア活動

ABCは心身に障害を持つ子供達が特別な教育支援を受けたり、貧困や家族問題により十分な教育・保護を受けられない子供達が学べるように支援したりするNPOです。私たちは手作りの紙芝居や歌を披露したり、グループに分かれて話し合いをしたり、日本の伝統文化である浴衣の着付けや書道、紙飛行機づくりを彼らに体験してもらいました。中でも着付けと書道が人気でした。最初は固かった子供達の表情も、次第に明るくなっていきました。私たちも彼らとの交流を一緒に楽しむことができました。



コロンビア大学の学生とのディスカッション

私たちはコロンビア大学日本語学科3年生とディスカッションを行いました。テーマは「日本の習慣と宗教」です。彼らが日本語を勉強しているということで、話し合いは英語でなく日本語で行いました。事前に日本の習慣と宗教について調べて準備してい



ったのですが、予想以上に深い質問に言葉に詰まってしまうこともありました。例えば、「香典があるがなぜお返しをするのか」「角隠しにはどんな意味があるのか」「神社やお寺は現在の家庭でどのように結びついているのか」「神社はなぜ赤いのか」「靖国参拝をする小泉首相をどう思うか」などです。電子辞書に頼りながら質問に答えるという形になってしまい、自国文化の知識の無さを痛感することになりました。世界に目を向けると同時に、日本も見つめ直さなければいけないと感じました。

ディスカッション後は、広島出身のメンバーの一人が、「原爆・ヒロシマ」についてのプレゼンを行いました。彼らは静かに耳を傾けていました。アメリカ人から見る原爆は彼らの目にどのように映ったのでしょうか。

最後に、私達は「千の風になって」を歌い、素晴らしい交流会となりました。

後方支援として参加して

菅原実香 大川友理恵 加藤智望 山井めぐみ

私たちは文教ボランティアズの活動の中で、後方支援として事前準備を行ってきました。今回の訪問先は、ボスニア、フィリピン、ウガンダ、ボリビアの4カ国で、いずれも紛争や貧困によって物資があまり行き届いていない国々です。私たちは、現地に行って活動することはなかったのですが、準備やその後の報告会等を通して多くのことを学びました。

1. 募金活動

学外では茅ヶ崎駅前を土日を中心に通行人に、また学内では昼休みを利用して学生たちに募金の協力を呼びかけました。募金をする上で工夫した点はただ大きな声で呼びかけるだけではなく、訪問する国の写真や現状などをパネルにして掲示したことです。まずは目からの印象によって、少しでも関心を集めることが募金への第一歩だと思いました。集められたお金がどのように使われるのかなどを詳細に説明することによって、人々の理解を得ようと試みました。募金活動を行ってきた中で、私たちの呼びかけに振り向いてくれる人、振り向かずにその場を通り過ぎる人、快く募金をしてくれて暖かい言葉をかけてくれる人など、様々な反応を見ることができました。文教ボランティアズに参加するまでは、募金をする側だったメンバーも少なくなく、初めての経験によってボランティアの意義を学ぶことができました。集められた募金は、ボスニア・ヘルツェゴビナへ全額寄付し、現地の方にも喜ばれたとの報告が聞けてよかったです。

2. フリーマーケット

募金のほかに私たちは6月から、湘南台駅付近で月に一回開催されているフリーマーケットに参加し、売り上げの収益を現地に寄付するために、募金活動と同様炎天下で活動しました。フリーマーケットに出品する商品はメンバーが持っているものだけでは足りず、大学の教職員や学生、家族に必要なものを提供してもらいました。今までフリーマーケットに参加したことがなかったので、値段の設定や声かけなど初めのうちは円滑な運営に苦労が絶えませんでした。自分たちの目的を言葉で伝えることによって興味を示してくれ、買ってくれる人が増えていくのがとても印象的でした。お客さんも子供からお年寄りまで幅広かったのでそこで交わした会話なども、学校生活では味わえない経験となり、ボランティア活動という枠を超えて活動できたと思います。また、学内で行なったフリー

マーケットでは服やかばんなど用意した商品が若者向けのものが多かったこともあり、多くの学生たちが買って来て私達も楽しみながらできました。

3. 物資集め

現地へ持って行く物資をどのようなものにするかをみんなで考え、鉛筆・シャーペン・絵具・サッカーボールなど、特に子供たちにとって必要となるものを用意しました。メンバーの出身校や茅ヶ崎市内の学校などに物資の依頼をし、準備を進めていました。その過程で考えさせられることがいくつかありました。それは物資を寄付することによって、現地の子供たちの中で取り合いがおきてしまうのではないかということなどです。集まった物資にも限りがあり、みんなに公平に渡すことが困難であるため寄付することによって喜ばれるどころか、逆にありがた迷惑になってしまうのではないかという意見もありました。私達は物を寄付することによって現地の人々の助けになればという思いで活動してきたけれど、相手の立場になって考えた時に果たしてそれが本当に必要とされているものなのかと考えました。これは物資援助だけに限らず、ボランティアをしていく上でもこれからの課題になっていくと思います。

4. 最後に

この半年間、文教ボランティアズの後方支援として、現地に行ったメンバー達とともにとても有意義な時間を過ごすことが出来ました。出発までは上記のような活動をしてきましたが、夏休み明けからは、先日開催された学祭に向けての総まとめに入りました。私達は直接的に現地報告などは出来ませんでした。写真貼りやポスター作りなどの仕事によって少しでも多くの人に私たちの活動を知ってもらおうという思いで取り組んできました。3日間のうち2日間は不運にも台風に見舞われてしまいましたが、それでもたくさんの方に来ていただき、自分たちの活動をきちんと報告できたと思います。

現地には行きませんでした。中村先生、生田先生を始め、メンバーの仲間たちとの準備や事前・事後学習を通して、途上国の現状やボランティアの意義など、今まであまり深く考えていなかった問題にも目を向けることが出来ました。先日の座談会で、ボスニア、フィリピン、ウガンダ、ボリビア、そしてニューヨークで活動したメンバーの感想を聞きました。現地の人々との交流によって感じた喜びから、生活状況を目の当たりにしたショックなどそれぞれが現地から学んできたことが多いと知り、一緒に頑張った仲間としてとても嬉しく思います。短い期間でしたが、自分を成長させる充実した日々でした。この文教ボランティアズでの活動をこれからの学生生活に役立てたいと思います。

制 作	文教ボランティアズ
発行日	2007年12月25日
発 行	文教大学国際ボランティア委員会 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100
電 話	0467-53-2111
E-mail	ikuta@shonan.bunkyo.ac.jp
協 力	文教大学国際学部
印 刷	株式会社 三光堂印刷 神奈川県藤沢市本町1-3-33



2007年ボランティア活動参加者